

秋が深まっていく頃、薄暗くなった夕刻のことである。  
 「来てるよ。まだ、あそこにいるみたいよ」と、カミサンがちょっと目配せして囁きます。  
 そちらを見ると、網戸越しに、とがった小さな三角形の耳が見え隠れ。  
 「外は寒いじゃろうに…アイツ何を考えとるんかのう」  
 腹も減ったっし、夜になると外は冷え込む。寒さの苦手なネコにはツライ季節になったのです。  
 <暖かい家の中に入りたい！>  
 しかし、「彼女」には入りたくても、入れない「ツライ事情」があるのですよ。

このネコが私達の所に現れたのは今年の春。ポカポカと暖かい日差しが心地よい、昼下がりのことです。住み慣れた神戸から広島に、4月にUターン転居した長男一家と、母を交えて、「三時のティータイム」のひと時を庭先で楽しんでいました。なぜか一匹の黒い猫が、私達の側に来て、座っているのです。まるで、ウチに長年居るかのように当たり前の顔をして。  
 黒猫といっても、体全体は黒くて、鼻と首の回りと足の先だけ白いネコ。  
 白いエプロンに、白いハイソックスをはいた黒ネコというわけです。



「何？コイツ？このネコどうしてここにおるん？」  
 「よくわからんけど、最近よく見るよね」  
 「首輪もないし、ノラじゃあないかね」  
 「それにしては、人なつこいよ。逃げないよねえ」  
 ……そうなんです。コイツは最初から、不思議なくらい側から離れなかったんです。それだけでなく、呼びかけると<返事>をするんですよ。  
 ウソじゃありません。本当ですよ。  
 いつもウチのまわりで見かけるので、何となく「顔見知り」の感じになって、ツイ声をかけるのです。  
 「ニャン！どこへ行くんや？」ー<ニャオー>と答えて側にトントンと寄ってきます。



「大のネコ嫌い」のカミサンが、珍しく好意をもっているようですよ。  
 「変わったネコじゃねえ。どこかで飼われとるんじゃないかかね？」  
 「そうかもしれんが、今は餌をもらおうとらんね。首輪もないし、スゴイ痩せとるもんね」  
 「背中の中も、赤茶けてボロボロじゃねえ」  
 「何か事情があって捨てられたんかもしれんな」  
 「カワイソウにねえ…なんとかしてやりたいねえ」  
 <エッ！本気かいの？>と思いましたよ。よく見ると、なかなかの「美形」。  
 「面食い」のカミサンに気に入られたようです。そこで私はニャンの気持ちを確かめましたね。  
 「ニャン！オマエ、ウチで一緒に暮らすか？」ー<ニャンニャンニャオー！> (いいとも！)  
 ……というわけで、何となく飼うことになってしまったんですな。

ウチで飼うということになると、まずは首輪を付けてやり、名前も考えないといけません。  
 「<ニャン>で返事をするんだから、<ニャンちゃん>でいいのよ」  
 カミサンは、そんなことにあまり関心がないようです。せっかく我が家に来たのに、それではあまりにも愛想がないと思ったんですがね。次の問題は、誰が面倒をみるかということ。具体的には、朝晩の餌やりのことです。  
 これはとりあえず、小学一年生の孫娘にやらせることにしました。小さい頃

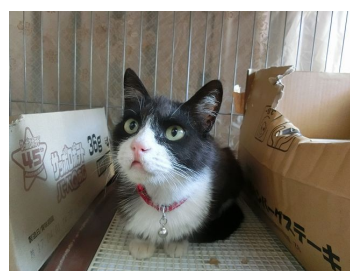


から、他の動物に接することはいいことだと考えたのです。本人も喜び、朝晩の日課となって、ニャンも馴れてくれたのです。しかし、困った問題が発生して、私が交代することになりました。その辺の事情については、今回は省略することにしましょう。

「一緒に暮らそう！」などと言ったものの、我が家には大きな問題がありました。このコラムでも幾度も登場している、我が家の牧羊犬種「ウエリッシュ・コーギー・ペングルーク」の「ベリーちゃん」の事です。つまりワンちゃんという、「先住民」がすでに存在し、すでに3年を過ぎているのですよ。＜彼女＞はネコに対して、吠えたり、追いかけたりといった「攻撃的な行動」をすることはありません。だからといって、「好意的」というわけでもないのです。ネコという生き物に対して、単に無関心なのです。自分の敵でもないし、仲間とも考えていないようです。庭で遊んでいる時には、お互いに意識しながらも、一定の距離をおいて向き合っているという感じでしたね。



ウチに居ついた初期の頃に、ニヤミス(異常接近)をしたことがありました。庭の真ん中で寝転んでくつろいでいる「ニャンちゃん」に、ベリーがススッと近寄ったのです。決して攻撃するような動きではなく、「何しているの」という感じで覗き込んだのですが、ニャンは驚いたようです。思わず前足でワンの顔面をくネコパンチ！＞いきなりの攻撃にビックリしたんでしょうね。ワンは、悲鳴こそ上げなかったものの、あわててその場から退散しましたね。それ以来、ベリーはニャンに近づかなくなりました。たった一発で力関係がハッキリしたのです。ワンの方が大きいのですから、弱いわけではないのです。ただウチのベリーは無用の戦いを避ける「平和主義者」なのです。しかし、それは自分のテリトリー(縄張り)でない、外の世界でのこと、家の中となると全く違って来るはずなのです。



ワンちゃんとの「同居問題」とは別に、もう一つ大きな「問題」がありました。3年前に我が家にワンちゃんを迎えた時も、このことを避けることは出来ませんでした。「避妊手術」の事です。偶然にも両方ともにメスでしたからね。このことについては、生き物の本性をヒトの都合で奪うことです。はたして彼らにとっていいことなのか「異論」はあると思います。私達は、毎年生まれてくるであろう「子ネコ」の処理に責任を持ってないこと、そしてニャンの母体の健康のこともありました。それも、

手遅れにならないように、早めにやる必要がありましたね。まずは先だつ問題は経費です。馴染みの動物病院で聞いてみると、思っていた以上の手術代がかかるようです。カミサンはため息をついています。

「三万円位かかるみたいよ」

「ネコを飼うのも安いカンのう」

「それとカゴに入れて、病院に連れて行かんといけんしね」

「カゴの中にオトナシク入ってくれるかのう。大暴れしたらどうする？」

その日から私は、餌をケージの中でやることにしました。慣れさせて、ニャンちゃんの警戒心を解くためです。あとは、病院と連絡して、いつ閉じ込めを実行するか、という問題でした。



そんなことをカミサンと相談していると、ものすごいタイミングで「救世主」が現れましたね。私の父方の従姉の Y さんが、その時に立ち寄ってくれたのです。無類の「ネコ好き」であることは以前から知っていましたが、彼女が願ってもない「ネコ情報」をくれたのです。NPO(民間非営利組織)だと思のですが、動物愛護団体の人を紹介してくれたのですよ。その人が直接、ネコを受け取り、病院に連れて行ってくれる、そして費用もずい分と安くなるというのです。もちろん、わたしたちは「渡りに船」とばかりに、この話に乗りましたよ。「案ずるより産むがやすし」、この難題を難なくクリアすることが出来ました。それはニャンがウチに現れて一か月余り経った5月下旬のことでした。

「カゴに閉じ込めても、全然暴れんかったね」  
「ヤッパリ、小さい頃に家で飼われとって、カゴに慣れとったんじやろうよ」  
「お医者さんの話では、もうピンポン玉位の子が二匹おったんと！」  
「ホンマかいの！避妊と堕胎を一緒にやったということか！」  
「体がだいたい弱っとるけえ、当分気を付けてやらんといけんよ」



母体にダメージを受けているので、それからの一週間は「入院生活」というわけです。カミサンは、ワンちゃんの子犬の時に使っていた1m四方のサークル型のケージを出してきました。車庫の角に置いて、木製の板で上から蓋をして、中には小さな寝床とネコ用トイレを置き、完全隔離の状態にしましたね。「大のネコ嫌い」だったはずの彼女が、実にかいがいしく世話をしてくれたのです。



その後、ケージから解放されて、畑の横で休んでいる姿みると、以前よりもヤツレタように見えました。フツと見ると、腹部にある乳がふくらんで、子ネコを育てる体になっていたことがわかりました。ムゴイことをしたという思いがしましたよ。しかし、あのように痩せてボロボロの体で産んだら、命が危ない状態になっているのではないかと、とも思いましたね。

「ニャンちゃん、ゴメンな。勘弁してな。これから元気になって、いっしょに暮らそうな！」  
「ニャオーン」…＜彼女＞はか細い声で返事をしてくれましたね。

春が過ぎ、炎天の季節に向かっていく中で、それから「ニャンちゃん」は、見違えるばかりに元気になってゆきましたね。赤茶けていた背中の中毛は、黒々とツヤのあるビロード状になり、ゴツゴツした背中丸みも帯びて、腹回りはプックリとふくらんで、あきらかに太ってきたのですよ。朝夕に餌をやっている、一向に太らなかったのは、子を宿していたことが原因だったのでしょうか。今年はとりわけ厳しい暑さでしたが、ニャンはとても元気でした。「快適な場所」を求めて、木陰や風通しの良い所など、涼しい所を探して居場所を移動してゆくのです。夏の夕べ、庭の隅の石にもたれて、外の風景を眺めている＜彼女＞の姿をよく見かけましたね。一体、何を想っていたのでしょうか。

こうして10月の初旬の頃まで、しばらくは平穏な毎日が過ぎてゆきました。「内回り」のワンちゃんと、「外回り」のニャンちゃんということで、「棲み分け」ができていたのです。初秋の頃のお気に入りの「住み家」は、母家の裏側にある古い温室。父が50年以上も前に造った小さなハウスで、あまりに傷んでいるために、今は物置となっているのです。ボロボロのゆえに適度なすき間風が入り、雨も降りこまず、ガラス越しの柔らかい日差しが入って、ネコには快適な場所であったようです。



ニャンは一日中、そこにいるようでしたね。あまりに幸せそうでしたので、聞いてみました。  
「ホンマに、気持ち良さそうなのう。ほいじゃが、寒くなったら、どこに行くんや？」  
「ニャン ニャン ニャオー！」(そんな先のことはどうでもいいじゃないの！)  
そうなんですよ。「今ここに我あり」―「現存性」ということですな。コイツ哲学を学んでますよ。  
しかし現実の世界は厳しいです。そんな「しあわせな時間」はそう長くは続かなかったのですよ。

11月になると、心地よい秋晴れのポカポカ陽気は終わり、朝夕の寒さがめっきり加わって、底冷えのする気候となってきました。ニャンにはツライ季節が到来したのです。  
「夜のあいだ、このまま外に置いとくのもカワイソなのう」  
「一度、家の中で一緒にしてみるかねえ」  
「本気かいの！ 犬とネコのバトルにならんか？」  
「大丈夫よ。あの子はやさしいから喧嘩はせんよ」  
「イヤイヤ、家の中はアイツの縄張りじゃけえ、何をするかワカランど」  
「もしかしたら、仲良くやってくれるかもしれんよ」  
というわけで、「楽天家」のカミサンの意見に従って、一度トライしてみることに相成りましたね。  
ここからは、ワンとニャンの＜プロレス中継＞となります。

サー！いよいよワンとニャンがリングの中へ入りました。  
＜ナンだ！コイツは！＞ワンは以外な相手の登場に、あきらかに戸惑っています！  
ニャンはライオンのごとき足取りでゆっくりと徘徊！余裕の表情！。全く怖れていません！  
アレッ！ワンがニャンの側にススッと近づきました！ニャンがクルリと顔を向ける！  
鼻と鼻、わずか10cmの至近距離だ！危ない！  
ライオンとオオカミ、宿命のDNAの激突！凄惨なバトルの開始か！  
イヤ、ワンがサッと引きました！＜お前とヤル気はないよ＞なんと戦いを放棄しました！  
そしてワンはカミサンの膝の上に！＜コイツなんとかしてよ！＞  
その横にニャンが来た！ワンをしっかりと見ています！＜オマエはイイなあ！可愛がられて＞  
これは何だ！もしかしたら、これはジェラシーのバトルなのか！  
オット！今度はニャンは部屋の中央にスワッタ！悠々と前足を舐めている！  
そして、ワンは何処だ！部屋の隅でウズクマッタ！イジケています！  
＜ゲームオーバー＞ここで終了のゴングです。



というわけで、一応の決着は着きました。一見ニャンが勝って、ワンが負けたという感じですが、実際にはそうでもないという感じがします。ウチのベリーは牧羊犬としてのDNAを持っているのですよ。牛や羊には激しく反応しても、人や他の動物に攻撃的になることはないのですね。つまりは無用の戦いを好まない「平和主義者」なのです。ニャンは動物的な本能で、ワンが攻撃してこないことをすぐに見抜いたのですよ。イヌやネコには、本能的なテリトリー(縄張り)の意識が強くありますが、それがすぐに暴力や闘争に結びつかないということがわかりましたね。そして、今回のことで感じたのは、ジェラシー(嫉妬)ですね。ネコは一見クールで外に表現をしません、イヌの場合はハッキリと主張してきますね。これぐらいで済んだのは、私が「二番目の主人」であったからでしょう。





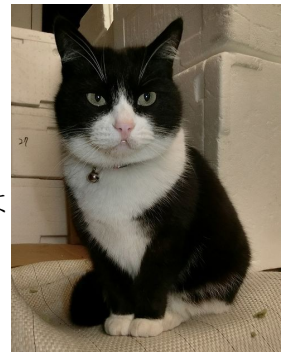
このバトルの後で、ニャンを外に出すと、ススッとベリーが私の所にきましたね。そして、前足をガバッと私の膝の上に乗せて、私をしっかりと見つめたのです。それは私に何かを訴えている目でしたね。＜私を捨てないでネ！＞もしくは、＜浮気は許さないからね！＞と言っていましたよ。

そう、コイツは嫉妬しているのです。ニャンの「世話係」をしている私に対してです。私はウチにいるワンちゃんもカワイイのですよ。しかし、外のニャンちゃんも同じ位カワイイのですね。困ったもんです。

この気持ちは、「浮気をする男」に、かなり似ていませんか。いやいや、私は昔から「モテないクン」ですから、そんな実体験はないですが、ワンとニャンの間に立って、自分のやっていることに「やましさ」を感じていましたね。「両方を可愛いがる」というのはいけないことではないか、と思い始めたのです。

イヌは一途に愛を求める「貞淑な妻」。それに対してネコはワガママで気分屋の「愛人」ですかね。カワイイけれど、なかなか「思い通りにならない女」なんですよ。ちょっと抱いてやろうと手をのばすと、するとスルリとかわして逃げる「ズルい女」なのです。そのくせスゴイ「寂しがり屋」で、時々妙にナツITE、誘ってくるのですよ。簡単に心が読めないミステリアスな女ーそれがまたネコの魅力かもしれないですね。イヌとネコというのは、ヒトに対する「依存性」が違うのかもしれませんが。つまり、「あなたなしには生きてゆけない」のがイヌで、「あなたがいなくても他に男はいるわ」というのがネコですね。ヒトと距離をおいたクールな関係、自立した存在であることを、ネコは好むようですよ。

私はネコの動きが好きですね。ライオンのようにゆったりとした足取りで歩いているかと思うと、時に素早い身のこなしでダッシュするのです。その速さと跳躍力、スゴイ身体能力の持つケモノという感じですね。白いソックスをキッチンとそろえて、背筋をピシッと伸ばして椅子の上に座っている姿は、さながらタキシードを着たタカラジェンヌー「男装の麗人」という感じです。オッこれは少しほめ過ぎでした！ 食べ方も上品です。どんなに空腹でも、ゆっくりとキレイに食べますよ。コイツがウンチをするときの仕草も好きですよ。庭や畑の柔らかい土をさがすと、前足でサッサッと掘るのです。それから用をすますと、チョッと匂いをかいで確認し、また前足でススッと土をかけ、完全に隠したら、ゆっくりとその場を去っていくのです。これはマナーというより、自己防衛のためのネコの本能的動作だと思いますがね。そこへいくと、ウチのベリーはいけません。道路の真ん中でいきなりウンチ、ですからね。全く無防備で、マナーどころではありません。ネコの方がより野生に近いということでしょうかね。



どうすれば、ニャンを中に入れて、ワンと共存させられるかーこれには悩みましたね。まず避妊した時に入れたケージを出して、隣の部屋に置きました。昼間はともかく、寒くなる夜間だけケージに入れてはどうか、と考えたのですよ。これは失敗でした。ネコは閉じ込められるのを嫌がりますからね。そこで、餌をやる時に捕まえてケージに入れようとしたのですが、これは最悪のやり方でした。極端に警戒して、餌をやっても近づかなくなりました。そこでウチの中に餌を置いて、入らないと食べられないというやり方にしたら、どうなったか？

「外は寒いし、お腹はペコペコ。ウチに入りたいけど入れない」……「ニャンの悩み」が始まったのですよ。

ここで、このコラムの冒頭に戻りましょう。秋の暮れゆく頃の夕刻です。

11月も半ば、暦のうえでは立冬と言われる季節になると、夕暮れ時はグッと冷え込んできます。

ウチの外で暮らすニャンには、夜の寒さは厳し過ぎるのよ。

ワンはあきらかに、ニャンがテリトリーに入ってくるのを嫌がっています。そして、ニャンはケージに入るのを嫌がっています。それじゃあ、一体どうすればいいか？

カミサンに素晴らしい考えがヒラメキマシタ！

「同じ部屋の中に、ニャンの新しい居場所を造ってやればいいのよ」

それが、ホームセンターで見つけた「キャットタワー」でした。以前に大宮の友人宅に泊まった時にネコのために、置いてあるのを思い出しました。イヌは下のフロアーで暮らし、ネコは上で眠る。

これにて一件落着。うまくいくかと思いましたが……ダメでしたねえ。ウチのニャンは全く興味を示さなかったのですよ。自分で上がろうともせず、抱いて棚の上にあげても、すぐに下りてくるだけ。

「どうするんだよ！ あんな大きなもの買ってきて」

「物置台にするしかないよね」

「雛人形を飾る台にエエかもしれんな」—という結末になりましたな。

そうは言っても、何とか夜の冷え込みをしのげる住み家を造ってやらねば、ということで、カミサンは、さらに次の作戦に出ましたね。「ネコのこたつ」なるものを見つけたのです。ダンボール箱をくり抜いた中に小さなキャットハウスなるものを入れ込み、その中にネコ用の電気毛布を敷いたのです。さらに周囲に、防寒と防風のために、毛布と発泡スチロールでガッチリとガード。土間の中に電源もあったのがラッキーでしたし、電気代はほんのわずかなものでした。

「ニャンのヤツ、気持ち良さそうに入っとったよ」

「ヨカッタ！ 気に入ってくれたんじゃないか」

「これでアイツも、なんとか冬を越せるのう」

それは何度も作りなおしたすえの成功でしたね。

これで、「ニャンの悩み」が少しだけ解決したようです。



私はこの頃、ひそかにニャンちゃんに名前をつけてやりました。

この頃にちょっとしたキッカケがあって、「ネコの小説」を読んだのです。谷崎潤一郎の「猫と庄造と二人の女」— 芦屋のボンボンの「ダメ男」がいて、別れた女と再婚した女がいて、男が溺愛するネコに二人の女が嫉妬して…という大変シンプルな構成の話ですね。文庫本で120ページ程度の短編ですが、台詞は流暢な関西弁で書かれていて、オモロイ世界でしたね。この小説の主役は題名通り、まぎれもなくネコの「リリー」。庄造と二人の女はリリーに振り回されるのですよ。この名前をウチのニャンちゃんに頂きました。＜彼女＞にふさわしい名前だと思いますので、二人だけの時に使っていますよ。「リリー、ハウスに入りたいか？」

一月某日の昼下がり。

天井ビニールの向こうは、青く澄んだ冬の空。

ハウスの中はイチゴの白い花が満開で、ミツバチがユラリユラリと一生懸命にお仕事中。

そして、椅子の上には黒いネコ、こちらは丸くなって居眠り中。

平和な安らぎの風景。これはイチゴ栽培が私にくれた「最高のプレゼント」。

出来る事なら、これからズーと、いつまでも続いてほしい風景です。



**「ウシは今年69歳、ベリーは4歳、リリーは推定2歳、  
こいつらのためにも長生きしてやらんぞいけんのう」**